

三島口の坑内では、湧水をしばらくとる水抜坑が四本掘られ、導坑をきりひろげる作業が推し進められていた。その導坑の切端は、地震が発生した日、偶然にも丹那盆地を走る断層線と完全に一致した位置にあった。

トンネル内には、地震とともに不気味な轟音がとどろき、上下に揺れた。が、トンネルは地震に強いといわれているので坑外の官舎に住む技師たちは、異常は起らないだろうと信じていた。倒れた官舎はなかったが、戸や障子がはずれ家財が倒れて軽傷を負った者が多く、余震がつづいて、人々は戸外でうずくまっていた。

夜明けにはまだ時間があり、空には星が光っていた。

三島口派出所主任の橋本哲三郎技師は、官舎の外に寝巻きのまま飛び出したが、揺れがはずまっていたので家の中に入り、服を身につけて外に出た。あたりは騒然とし、余震があるたびに悲鳴がきこえ、なにかが倒れる音がある。地震と同時に停電していて、附近一帯は闇であった。

石川九五技師が、技手の市川亭介、富田終と駆けつけ、鹿島組の親方や坑夫長もやってきた。かれらは、大地震だけにトンネル内のことが気がかりで集まってきたのだ。

橋本も同じ思いで、かれらとともに坑口に急いだ。坑内の電燈は消え、送風機のモーターもとまっていた。橋本は、カンテラを集めさせ、雨合羽、ゴム長靴を身につけた。

カンテラに灯がともされ、かれらはそれを手に坑内に入っていった。

橋本たちは、側壁や床をカンテラの灯で点検しながら進んだ。余震がつづいていたが、坑道内の震動は坑外の三分の一と言われているだけに、驚くほどの揺れはなかった。

坑道の床に流れる水の上を進み、坑口から八四〇メートルの位置で、煉瓦をはった天井部分に亀裂が生じているのを見出したが、それは心配するようなものではなかった。点検しながら進む

かれらの歩みは、おそかった。

四十分ほど歩いた頃、前方にいくつかの光がゆれながら近づいてくるのが見えた。オーイという声がし、七人の男たちが水を蹴散らしながら走ってきた。

「山がぬけました」

中年の坑夫長の声は、うわずっていた。

「山が？」

橋本は、顔色を変えた。

坑夫長が、ときれがちの声で説明した。かれらは、水抜坑でボーリング作業をしていたが、地震を感じた瞬間、異様な山鳴りにつつまれ、同時に電燈が消えた。かれらは、闇の中でマッチをすって電線を切り取り、そのカバーに火をつけて足もとを照らしながら、導坑に入って引き返した。

坑口から三、三〇〇メートルの地点では、導坑をトンネルの大きさまで掘りひろげる作業がおこなわれていたが、そこに土石が崩れ落ちていて出られない。そのため、引き返して水抜坑をまわり、引き揚げてきたという。

橋本たちは、顔を見合わせた。関東大震災でも事故は起らなかったのに、トンネルの一部に崩壊事故が発生したという。人命が損なわれないなければよいが、と念じながら、橋本は、坑夫長たちと足を早めて奥へ進んだ。

坑口から二、一六〇メートルの位置では、側壁に横に長い亀裂が走り、それは一二〇メートルもつづいていた。坑道内の水の流量が増していて、その上に張られた板の上をふんで急いだ。カンテラの灯だけで歩くのは困難で、足をふみすべらして水の中に落ちることもしばしばだった。

再び前方にいくつかの光がみえ、近づいてきた。電線のカバーを燃やしたものを手にした十名の男たちであった。

「五人が生き埋めになっています」

先頭に立つ男が、顔をひきつらせて言った。

かれらは、坑口から三、二四〇メートルの附近で導坑を掘りひろげる作業をし、蓄電車に連結したトロッコに掘りくずしたズリ（土石）を入れていたが、作業員の大半は、休息をとっていた。その時、導坑の床がゆれ、山鳴りがするとともに電燈が消え、すさまじい崩壊音が起って砂をまじえた突風が走った。

かれらは、闇の中を悲鳴をあげて坑口にむかって這った。崩壊音がつづき、やがてしずまった。マッチをすり、電線を切りとってそのカバーに点火した。だれの顔も土埃でよこれ、石にうたれて顔や手から血を流している者もいた。坑道の奥に、崩落した土石がうずたかくひろがっているのがみえた。

かれらは、光のまわりに集まり、互いの顔を見合わせた。落ち着きをとりもどした坑夫長が、点呼をとった。集まっていたのは十名で、五名の姿が見えなかった。

坑夫長は、さらに電線を何本も切り取らせて点火させ、五名を探すよう命じた。男たちは、恐るおそる崩壊箇所近づいたが、余震のたびに土石が落ち、後ろへさがった。

そんなことを繰り返しながら探したが、五名の姿を見出すことはできなかった。かれらは、新たな崩壊が起ることを恐れ、足を速めてその場をはなれてきたという。

姿が消えたのは、ズリ出し作業員の朴順介（二十八歳）、金芳彦（四十一歳）、孫寿日（三十一歳）、蓄電車運転手沼沢亀五郎（二十八歳）、連結手李賢梓（二十二歳）であった。

橋本は、石川技師や親方たちと話し合った。

五名の者が遭難したことは、ほぼ確実で、一刻も早く救出しなければならぬ。崩壊現場から退避してきた十名とボーリング作業をしていた七名は、傷を負った者もいるので坑外に出す。橋本、石川と二人の技手はこのまま現場へ進み、親方たちは、急いで坑外に出て救援隊を組織して現場へむかわせることになった。かれらは、坑口の方へ小走りに引き返していった。

橋本たち四名は、再び進みはじめた。大正十年に熱海口で十六名、十三年に三島口で同数の死者を出し、さらに五名を失うのかと思うと胸が痛んだ。家族の悲嘆を眼にすることが辛く感じられた。

坑道内は余震でしばしば揺れ、そのたびに天井から土や小石が落ちてくる。かれらは、恐れることもなく足を速めて進んだ。

坑口から三、〇〇〇メートルの位置に達すると、床がその地点から二〇センチもさがり、側壁にも亀裂が生じていた。そこには小断層があって、地震で坑道の奥が沈下しているのを知った。

三、二四〇メートルの位置から六〇〇メートル奥まで導坑が掘りひろげられ、天井と側壁にコンクリートをはる事が予定されていた。橋本たちは、その部分に土石が崩落しているのを見出した。さらによくみてみると、崩壊個所の天井の上方がえぐられて空洞になり、崩れていない奥の坑道に通じているのを知った。

崩壊は、地震で支保工が倒れ、支えていた土石が一斉に落下したために起ったものであることはまちがいがなかった。

橋本たちは、現場で救援隊がくるのを待っていたが、いつまでたっても坑口の方向に光は現われなかった。

坑外に走り出た親方や坑夫長たちは、宿舎を走りまわって事故の発生を告げ、救出にむかう者をかき集めることにとどめた。が、どの宿舎も地震で破損し、怪我人も出ていて大混雑を呈していた。姿のみえぬ家族をもとめて走りまわっている者もいた。親方たちは、声をからして人手を集め、ようやく五十名ほどの坑夫が揃ったので、全員にカンテラをもたせて坑内に入った。

かれらは、急ぎ、一時間後に現場にたどりついた。しかし、男たちは、おびえたように立ちすくんだままであった。坑口からその位置までは、天井も側壁も煉瓦またはコンクリートがはられていて危険はなかったが、崩壊したあたりは、掘りひろげられたままコンクリートもはられていないので、余震があるたびに天井から土石が落ちてくる。

橋本と石川技師は、現場に立ち、
「作業にかかれ」

と、交互に叫ぶ。

しかし、坑夫たちは、恐れおののいて崩壊個所に近づこうとしない。それに苛立った親方が、鉢巻きをし、ツルハシを手にして土石に突き進み、坑夫たちに荒々しい声をかけて作業をするよううながした。

坑夫たちは、恐るおそる近づいていったが、余震とともに音を立てて土石が落下してきたので叫び声をあげて逃げた。

橋本は、かれらの前に立ち、

「そんなことでは、埋もれている者を救うことはできない。作業のできぬ臆病者は解雇するから、どこへでも勝手に立ち去れ」

と、怒りをふくんだ声で叫んだ。

大不況で失業者は巷にあふれていて、解雇するという言葉に坑夫たちは表情をかたくした。かれらは、おびえた眼をして崩壊個所に近づいた。

橋本は、まず、崩落した場所に支保工を組ませ、天井に丸太を並べさせて落盤しても危険がないようにした。男たちは、恐れおののきながら作業をし、二時間後に交替して休息をとった。

その後、轟音がして石をまじえた土砂が崩れ落ち、あたりが白く煙った。橋本は、三十分間坑夫を休息させてから作業にからせ、一区切りついたので作業を中止させたが、その後、またも小崩壊が起った。

坑夫たちの中には、いま崩れたばかりだから当分の間は大丈夫だという者もいて、かれらは落ち着いて作業をするようになった。

建設事務所から所員たちが、応援に駆けつけてきた。現場では膝まで水につかった坑夫たちが、本格的な救助坑の掘削作業をはじめていた。カンテラをたよりの作業で、一刻も早く電燈がつくのが待たれた。

函南村に送電しているのは、富士水電会社を買収した東京電燈会社であったが、同社の駿東郡清水村家庭にある家庭変電所で被害が生じ、送電不能になっていた。函南村への送電線は全滅状態で、五十一本の電柱が倒れ、電線の切断、設備の破損などいじりしかなかった。東京電燈会社では、社員を総動員して、その復旧にとどめていた。

余震は相変わらずつづき、時折り土石が崩落し、そのたびに坑夫たちは逃げた。坑道内に仮救護所がもうけられ、鉄道省嘱託医の阿部房治が、看護婦とともに治療具をととのえて詰めていた。が、崩壊状況からみて、五名の死は確実視された。

崩壊事故が起ってから十時間が経過したが、救助坑の掘削は、時折り起る土石の崩落で遅々と

してはかどらなかつた。坑外から握り飯と粉乳がはこばれ、作業員たちはおそい昼食をとった。鹿島組の現場主任である塚本季治郎は、五名の作業員の遭難に強い衝撃をうけていた。かれは、大正十三年二月に起つた事故で、先頭をきつて胸まで水につかりながら迂回坑に入り、死者の収容につとめた。その折りの無残な遺体の姿が眼の前にちらついてはなれなかつた。

かれは、崩壊個所の奥の坑道をしらべてみようと思ひ立ち、カンテラを手作業現場をはなれた。奥の坑道にゆくには、水抜坑をまわる必要がある。せまい水抜坑にはいった。水が音を立てて流れ、膝上まで達している。支保工の丸太がかたむき、土塊がせり出している個所もあった。

余震があるたびに流れる水が左右に揺れ、頭上から土が落ちて水面にしぶきをあげる。かれは、薄気味悪く思いながらも、カンテラをにかけて水の中を進んだ。

二十分ほど歩いた時、突然、

「オヤジー」

という叫び声と共に、闇の中から抱きついてきた者がいた。

塚本は、驚きと恐怖で、一瞬、体を硬直させた。抱きついてきたものが人間ではなく、死霊のたぐいか、と思つた。声が出ず、かれの眼は大きくひらかれた。

抱きついてきた者は、親爺、親爺と泣きながら叫びつづけている。ようやく落ち着きをとりもどした塚本は、カンテラの灯を男の顔にむけた。それは、ズリ出し作業員の朴順介だつた。

死んだと思つていた作業員が生きていることが、塚本には信じられなかつた。物の怪のたぐいではないか、と、朴の体を見まわした。

かれの胸に飲びがつき上げ、

「生きていたのか、よく生きていてくれた」

と、叫んだ。眼から涙があふれた。

かれは、朴の体をかかえて水抜坑を引き返した。朴は、足もともしつかり歩いて塚本と並んで歩く。

水抜坑を出た塚本は、カンテラの灯が動く作業現場にむかつて、

「生きていたぞ」

と叫び、朴の腕をとって足早に歩いた。

カンテラの灯の動きがとまり、男たちの顔がこちらにむけられている。塚本が朴を連れて近くと、男たちの間から一斉に飲びの声があがり、かれらは朴を取り巻き、激しく肩をたたいた。

朴は、泣きながらうなずき、男たちにかこまれて仮救護所に入った。

阿部医師が、朴を仮寝台に横たえさせ外傷をしらべたが、手の爪がとれていただけで傷らしいものはない。脈搏、体温にも特に異常はみられなかつた。阿部は念のため強心剤をうった。朴は、強い衝撃をうけたらしく眼はうつろであつた。

一応の診断を終え、阿部は粉乳をぬるま湯でとこしてあたえ、朴は、それを一気に飲んだ。

阿部の許しを得て、橋本が朴に救助されるまでの経過をたずねた。

朴は、うながされるままに口を動かした。突然の崩壊で、かれは土砂にうもれ、気を失つた。が、やがて意識をとりもどし、必死になつて土砂を手でかき、辛うじて這い出すことができた。周囲は漆黒の闇で、かれは側壁に手をふれながら歩いた。水の音と、時折り起る余震で土砂の落ちる音がするだけであつた。

かれは、歩きつづけた。時間の意識はうすれ、二、三日がすぎたように思えた。渴きをおぼえ、足もとを流れる水を何度かすくって飲んだ。空腹感はなかつた。疲れて側壁に背をもたせ、眼を

閉じた。その直後、明るい光がさすのを感じ、眼をあけた。光が近づき、よく見知っている塚本の顔が灯にうかんでいた。かれは叫び声をあげ、塚本にしがみついたという。

阿部医師は、朴を安静にさせ、救出されてから二時間後の午後五時に坑外へ出ることを許可した。朴は歩くと言ったが、戸板にふとんを敷いてその上に横たえさせ、男たちが板を支えて仮救護所をはなれた。

かれが坑外に出た頃には、夜の色がひろがっていた。

その日の午後六時、東京電燈会社の変電所の応急修理が成って、函南村の半ば以上に電燈がともり、動力も送られた。が、丹那トンネル三島口のある大竹地区は電柱や電線の被害がいちじるしく、その夜も停電したままであった。

二十七日の朝を迎え、崩壊現場では、坑夫と作業員が救助坑の掘削作業につとめていた。一人の生存者がいたことが、かれらを活気づけ、残る四名の遭難者の中にまだ生きている者がいるかも知れぬ、というかすかな期待も湧いていた。

余震はようやく少くなり、土石が崩れ落ちることも稀まれになった。作業人数は四十九名で、二時間おきに交替し、休憩所に入った者たちは、板の上に横になるとすぐ寝息を立てた。橋本主任と石川技師は、交替で仮眠をとった。

午後四時すぎ、坑内の電燈がつき、現場にいた者たちの間から歎びの音があがった。熱海建設事務所から東京電燈会社に何度も送電を要請し、電燈会社でも復旧を急ぎ、仮の電柱を建てたのである。

現場の空気は濁っていて、水の量も増していた。が、送風機と排水ポンプが作動し、作業環境は好転した。また、坑内電車も動くようになり、資材、食糧その他の運搬も容易になった。電光

で現場は明るくなり、救助坑の入口にもコードがひかれ、作業は順調に進みはじめた。

電燈がついて間もなく、救助坑の中から出てきた坑夫長が、深沢という坑夫とともに橋本主任の前に立った。

「深沢が、人の呻うめき声がきこえるというのです」

坑夫長が、疑わしそうな眼で言った。

坑夫長の話によると、深沢がそんなことを言ったので、救助坑を掘っていた坑夫長や他の坑夫が、深沢が耳にしたという個所に寄り集まって耳を澄ました。

深沢が、ほら、きこえると、はずんだ声をあげたが、坑夫長たちにはなにもきこえない。深沢は、ダイナマイトの炸裂音で鼓膜が破れていて耳が遠く、大きな声をかけぬとききとれぬほどで、それだけに深沢の言うことは信じられなかった。それでも、深沢は、きこえると言って主張をひるがえさないので、連れてきたという。

事故発生以来三十六時間が経過し、土石の下にいる者が生存しているとは思えなかった。過酷な労働で疲れきった深沢の幻聴にちがいない、と思えた。

しかし、橋本は、一応、深沢が呻き声を耳にしたという方向に掘り進めさせるべきだと考え、その旨を坑夫長に指示した。坑夫長は、深沢とともに救助坑の中に足早に引き返していった。

一時間ほどした頃、救助坑から坑夫長が出てくると、橋本に走り寄ってきた。

「土中から声がしました。生きています者がいます」

坑夫長は、甲高い声で言った。

現場は騒然とし、男たちが坑夫長を取りかこんだ。

深沢が呻き声のしたという方向に、総員で掘り進み、かなり進んだので、試みにオーイと呼ん

でみると、前方の土の中から、かすかにオーイと答える声があった。坑夫たちは喜び、再び声をかけて耳をすますと、それに応ずる声が届いた。

坑夫長は、報告すると小走りに救助坑の中へ引き返していった。

思いもかけぬ報告に、橋本は仮救護所に行き、阿部医師に応急手当での準備をととのえるよう依頼した。

石川技師が救助坑の中に入り、しばらくすると出てきた。救出隊は、二班に分かれて声のする方向に土砂まじりの岩石を掘り出して三メートルほど進んでいるという。

「助けてくれ、という声を私もききました」

石川は、興奮した声で言った。

声のする位置から考えて、レール上の上のっている蓄電車の運転手らしい、という。おそらく、蓄電車の中にいて、その上に土石が落下し、圧死することなく生き埋めになっているのではないかと想像された。もしもそれが事実なら鉄製の蓄電車の車体を切断する必要が生じるかも知れず、橋本は、石川に酸素切断機と酸素ポンプを用意することを命じた。

救助坑の中からは、掘られた土石が運び出されてくる。橋本たちは落ち着かず、救助坑の入口近くに集まっていた。

橋本が、堪えられぬようにカンテラを手に救助坑の中に入っていった。救助坑の奥では、十人近い坑夫たちが必死になってツルハシを動かし、シャベルを突き立てている。橋本は、後方からかれらの動きをながめていた。

そのうちに、シャベルの先端が金属に当たる乾いた音がした。蓄電車の車体にぶつかったらしい。坑夫たちの動きが、一層激しくなった。

「いた、いた」

はずんだ声だし、橋本は胸が熱くなるのを感じた。

すぐわれた土や石が出され、それを作業員が救助坑の外に運び出してゆく。橋本は、作業のさまたげにならぬよう救助坑の壁に背をはりつかせていた。

土にまみれた坑夫長が、這い寄ってきた。

「どうだ」

橋本が声をかけると、坑夫長は、

「電車の運転台に坐ったまま土砂で埋もれ、首から上が出ています。生きています」と、言った。

しばらくすると、奥から出てきた坑夫が、

「運転台から、どうしても出せません。車体をこわそうとツルハシでたたいてみましたが、だめです」

と、坑夫長に言った。顔は汗と泥にまみれていた。

「酸素で切るか」

坑夫長が、つぶやいた。

橋本は、酸素切断機を用意してあるので、すぐに作業にかかるよう命じた。

作業員たちが救助坑の外に出てゆき、酸素切断機と酸素ポンプを運び入れてきた。坑夫が、切断機を手に這ってゆき、やがて奥の方から青い光が、はじけるような音とともに点滅しはじめた。救助坑の最前部に入っていた坑夫長が、二十分ほどして這い出てきた。

「もうすぐです。思い切って切断しようとする火傷をさせてしましますので、苦心しています。」

熱い、熱いと言うので困っています」

坑夫長は、経過を報告すると再び奥の方に引き返していった。

奥の方であわただしい気配が起ったのは、それから間もなくだった。坑夫長につづいて坑夫たちが、泥だらけの男の体を曳いて這ってきた。

橋本は、急いで救助坑の外に出ると、

「救い出したぞ」

と、叫んだ。

男たちの間から、どよめきが起った。

救助坑から坑夫たちが男を曳いて出てくると、急いで仮救護所に運び入れた。顔が泥にまみれていたが、男は蓄電車運転手の沼沢亀五郎であった。時刻は午後七時半で、事故発生後三十九時間半が経過していた。

仮寝台に横たえられた沼沢は、意識を失っていた。阿部医師が脈搏をはかると一〇七で、正常値より三〇は高い。体温は三七度二分であった。阿部は、強心剤につづいてカンフル注射をし、その痛みで沼沢は意識をとりもどした。すぐにその眼を黒い布でおおった。

布の端から涙が流れ、

「ありがとうございます」

という声もれた。

かたわらに立っていた親方が仮救護所の外に出ると、

「息を吹き返したぞ」

と、大声で言った。

男たちは、両手をあげて万歳、と叫んだ。かれらの眼には光るものが湧き、口に手をあてて嗚咽なげなげをこらえている者もいた。

沼沢は、これと言った外傷もなく、酸素切断機で火傷も負ってはいなかった。しきりに渴きを訴えるので、阿部は二〇〇グラムの牛乳をあたえ、沼沢は、うまそうに飲み干した。

二人の生存者の救出に成功した坑夫たちは、休むことも惜しんで救助坑の掘削をつづけた。

しかし、午後十一時四十五分、土中から一個の死体を掘り出して仮救護所に収容した。ズリ出し作業員の金芳彦で、早速、棺が運びこまれ、三島警察署員立ち会いのもとに阿部が検視をおこない、死因を窒息と判定した。遺体を洗って新しく白い着物を着せて棺におさめ、坑外の三島口派出所内に安置した。

翌二十八日午前三時四十五分、ズリ出し作業員の孫寿日の遺体を収容した。残る一人の発掘につとめたが、その日も翌日も発見できず、三十日午前三時すぎ、ようやく電車連結手李賢梓の遺体を見出した。

これらの遺体は、丹那トンネル三島口の上方にある広場で火葬にふされ、合同の葬儀がおこなわれた。

遺体収容作業がおこなわれていた二十八日、本省から坑道被害の調査にきた広田孝一技師と滝口技師が、三島口派出所の橋本主任や技手たちの案内でトンネル内に入った。

かれらは、崩壊箇所を避けて水抜坑をまわり、導坑の奥の方に入った。崩壊によって電線が切断されていたので、手にカンテラをさげていた。

導坑は、最先端の切端から土砂が水とともに噴出し、三〇メートルほど押し出していた。が、支保工に異状はなく、床にも側壁にも亀裂は見えず、あらためてトンネルが地震に強いこと

を知った。

ついで、水抜坑の調査をおこなった。かれらは、膝頭近くまで水につかりながら南側水抜坑を進み、カンテラの光で坑内を入念に調査した。技師たちにまじって、その水抜坑の工事を監督した親方や坑夫長も同行していた。

切端に達した時、親方と坑夫長たちの間から、不審そうな声が同時にあがった。切端附近の様子ですっかり変わっている。技手たちも、驚きの声をあげて切端を見つめた。

荒い肌をしているはずの切端の岩壁が、鋭利な刃物でも切ったように平坦で、しかも光沢をおびている。

「なんだ、これは……。ピカピカ光っている」

坑夫長が、薄気味悪そうにつぶやいた。

「もしかすると、断層鏡面かも知れぬ」

地質専門の広田が、切端に視線を据えながら言った。

「キョウメンのキョウは鏡ですか。たしかに鏡のようだ」

若い技手が、呆氣にとられたように立ちすくんだ。

支保工長の口から、突然、短い叫び声が起こり、他の者たちは、ぎくりとしてかれの顔に眼をむけた。支保工長は、切端の左の部分を指さしている。顔は蒼白だった。

かれの指さす部分に眼をむけた広田たちの口からも、同時に驚きの声があがった。

そこには、信じられぬ情景がみられた。

切端の岩肌に接して鳥居状の支保工が組み立てられているが、意外なことに左右に立っていた二本の柱のうち、右側の柱が消えている。広田たちは、なぜそのようになっていいのかわからず、

呆氣にとられて左側に立っている一本の柱を見つめた。

立ちすくんでいた支保工長が、足をふみ出して柱に近づき、恐るおそる手をふれたが、不意に後ずさりし、広田たちに顔をむけた。眼には、驚きというよりは恐怖の色が濃くうかんでいた。

「どうした」

広田が、かれの顔を見つめた。

「あの柱は、右側にあつたもので、それが左側に移っています。左側の柱は消えています」

支保工長は、とぎれがちの声で言った。

広田たちは、言葉もなく柱を見つめた。

「断層が動いたのだ」

広田の口からもれた言葉に、他の者の眼は一層大きくひらいた。

偶然にも、切端は断層線と一致していた。と言うよりは、断層に到達したので、その位置で一時的工事を中止していた。地震が起こり、断層の東側が北へ、西側が南へ大きく移動し、そのため、支保工の左側の柱は断層の裂け目に吸いこまれ、右側の柱が切端の左端に移ったのである。

かれらの驚きは大きく、呆然と切端の光る岩肌を見つめていた。

岩肌が鏡のようになめらかになっているのは、粘土質の東西の地塊が断層線を境にして、互いにこすり合いながら動いたからであった。岩肌には、水平に条痕が幾筋も走っていて、地塊が水平に動いたことをしめしていた。技手が写真をとり、広田たちは引き返した。

その夜、鉄道省から調査を委嘱された北海道帝国大学の福富忠男教授が、三島町につき、投宿した。道路が寸断されていたので、翌日、自転車でトンネルの三島口派出所につき、早速、広田らの案内で断層鏡面のあらわれている切端におもむいた。

福富の驚きは、大きかった。

かれは、切端の岩肌を入念に調べ、断層を境に東西の地塊が運動し、西側の部分が二・四四メートル水平に動いているのを確認した。断層運動が起ることなどきわめて稀で、その運動線と切端が一致したことは、偶然とはいえ余りにも不思議なことで、福富は、光沢をおびた切端の岩肌を見つめていた。

坑内調査を終えた福富は、技師たちとともに熱海建設事務所三島口派出所に行った。福富は、鉄道省への調査結果をまとめるため一室に入った。

事務所に集まった技師や技手は、断層鏡面に対する驚きを口にし、その断層が粘土質であったため鏡のような岩壁になったのだ、と言いつつ、

一人が、

「もしも、工事を中止せず、あのまま坑道を先に伸ばしていたら……」
と、言った。

他の者は、口をつぐみ、顔を見合わせた。

坑道を掘り進めていたとしたら、それは断層線を境にして食いちがい、奥の坑道にいた者たちは、大きな岩の戸がひかれたように閉じこめられたはずであった。

「天の岩戸がとじるように、前に伸びていた坑道は地中にその形のまま消えたわけだ」

その言葉にしばらく応える者はいなかった。

「それよりも、トンネルが完成した後、今度のような現象が起きたらどうなる」

技師が、他の者の顔を見まわした。

「それは恐ろしいことになる。汽車がトンネル内を走ってゆく。突然、地震が起り、断層線の位

置で戸がひかれるように岩の壁が立ちほだかる。むろん、大惨事になる」

他の技師が、険しい眼をして答えた。

沈黙がひろがった。丹那トンネルに断層が直角に走っていることは、地質調査によって確認されている。もしも、北伊豆地震と同じ規模の地震が発生して地塊が移動すれば、そのような現象が起ることは十分に想像される。

「しかし、汽車が、その断層部分を通過する時間は数秒にすぎない。その数秒間のことでとやかく考えるのは、どうか。万一、事故にあつたら余程運が悪いのだ」

年輩の技師が、かすかに笑った。

福富が、報告メモを書き終えて部屋から出てきた。

技師たちが、それまで話し合ってきたことをそれぞれ口にし、福富の意見をたたいた。福富は、しきりにうなずいてきいていたが、

「地塊が今回のように移動するなどということは、何千年何万年に一回のことです。たしかに、それでトンネルが断ち切られることが起きるかも知れぬが、地震学は急速の進歩をしていて、今に地塊運動の予知も確実にできるようになる。心配は無用です」

と言って、頬をゆるめた。

福富は、トンネルの熱海口も調べることになっていたので、熱海建設事務所員の案内で三島口派出所をはなれていった。

地震発生と同時に、東京の中央気象台は機敏な動きをしめし、地元の沼津測候所、三島測候所支台と協力し、地震の原因と再発のおそれがあるかどうかを調査した。